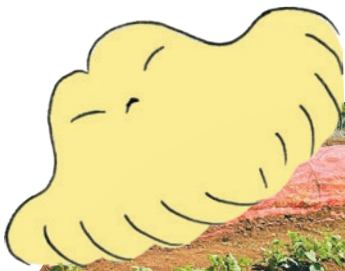




# サイボウズ ソーシャルデザインラボ 活動報告書 2026

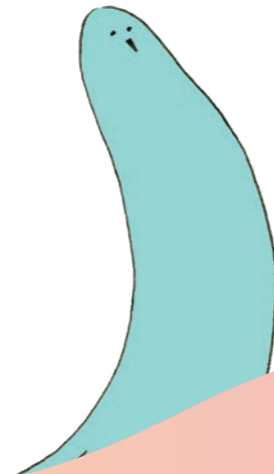
社会課題を解決する社会実証実験



# 目次



- 1 ご挨拶
- 2 サイボウズの楽校とフリースクール支援プロジェクト
- 3 地方創生 / 共創プロジェクト
- 4 就労困難者支援プロジェクト
- 5 障害福祉 / 共創プロジェクト
- 6 虐待防止プロジェクト
- 7 非営利団体との協働プロジェクト
- 8 サステナビリティ &  
カーボンニュートラルプロジェクト
- 9 災害支援プロジェクト
- 10 あとがき



## 1 ご挨拶



平素よりサイボウズ・ソーシャルデザインラボ（そでらぼ）の活動に対し、多大なるご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

私たちは「社会問題解決に向けた政府政策のためのエビデンスモデル作り」をビジョンに掲げ、複雑化する社会課題に対し、ITとチームの力で持続可能な解を導き出すことをミッションとしています。

2025年度、そでらぼは大きな転換点を迎えました。これまで中心であった社会問題の現状調査や政策提言に加え、具体的な解決策として「社会課題解決DXアプリパック」の提供を開始いたしました。これにより、単なるエビデンスの提示に留まらず、政策を現場で即座に実行へと移せる「実効性のあるソリューション」をセットで提供できる体制が整いました。理論と実践が直結した、そでらぼ独自の価値を確立できた一年であったと自負しております。

2026年度は、この2025年の成果を土台とし、政府の諸事業へさらに深く、積極的にコミュニケーションしてまいります。私たちが作り上げたモデルや仕組みを全国の自治体・官公庁で活用いただくことで、一つでも多くの社会問題を解決し、目に見える形での「社会インパクト」を最大化させていく所存です。

誰もが自分らしく、主体的に社会に関われる未来を目指し、チーム一丸となって邁進してまいります。今後とも変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

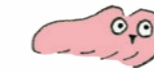


サイボウズ ソーシャルデザインラボ  
執行役員 所長 **中村 龍太**





# 3 地方創生 / 共創プロジェクト



## 2025 年度の成果

### 「自治体・教育委員会向け」、「フリースクール向け」アプリパックの提供を開始

不登校傾向にある子どもを持つ保護者への調査から、初期段階（フェーズ1）における「保護者の孤立防止」と「円滑な地域連携」の重要性が浮き彫りとなりました。この学びを形にするため、2種類のkintoneアプリパックを公開しました。



#### 1. 自治体・教育委員会向け「不登校相談窓口アプリ」

匿名で相談可能なオンライン窓口を構築。相談の緊急度に応じた優先順位付け（トリアージ）や対応状況を可視化し、組織内での一元管理を実現することで、迅速で漏れのない支援体制を支えます。

オンライン不登校相談窓口アプリ

#### 2. 「フリースクール向けアプリ」

日々の運営効率化と、保護者・在籍校との情報共有を支援します。名簿や出欠、活動記録の管理に加え、行政提出用の「通所状況報告書」等の作成にも対応。事務負担を軽減し、スタッフが子どもと向き合う時間を創出します。



「自治体・教育委員会・フリースクール向け」アプリパック提供ページ公式 HP

## 2026 年度の活動予定

「サイボウズの楽校」では、日々の活動を丁寧に積み重ね、子どもたちの自律的な成長と社会との豊かな交流を支えていきます。これまでの運営でみてきた「情報共有」の課題に対し、音声入力による活動記録の自動化やAI活用を進めることで、子どもと寄り添う時間を充実させていきます。

「フリースクール支援プロジェクト」では、業界や立場の垣根を越え、多様な志を持つ仲間たちとともに、教育現場の新しい情報共有のあり方を模索していきます。テクノロジーを介して、「学校・家庭・フリースクール・地域」が手を取り合い、子どもたちを取り巻く社会課題を一つずつ解決していく、そんな未来を一緒に創り出していきたいと考えています。

「サイボウズの楽校」やフリースクール支援に関心をお持ちいただける方はぜひ、ご連絡ください。



サイボウズの楽校公式 HP

## 「地方創生 / 共創プロジェクト」とは

日本の地方は今、大きな転換期を迎えています。人口減少や産業の担い手不足など複雑な課題は、もはや単独の組織で解決できるものではありません。

私たちは、ITを活用した情報共有を通じて、地域を一つの「チーム」にすることを目指しています。地域の課題は、絡まった糸をほどくように時間をかけて粘り強く向き合うことが必要です。

2025年度、新潟県でのDX人材育成や静岡県伊豆エリアでの自治体を越えた研修など、具体的なアクションが形になり始めました。その中からいくつかの具体的な事例をご紹介します。

### 地方創生/共創プロジェクト

目的：IT活用を推進しながら地域課題を解決する  
協働機関：自治体、関連団体、教育機関など  
活動内容

- ・地域自治組織の設立及び運営支援（関連団体）
- ・DX研修の実施（自治体）
- ・DX教育プログラムの提供（教育機関）
- ・プロボノ人材によるコミュニティ仕組づくり（関連団体）

地方創生 / 共創プロジェクト

## 2025 年の取組みについて

### 新潟産業大学 DX人材育成プログラム提供開始

新潟産業大学の経済経営学科においてkintoneを教材とした新たな講義を開始しました。地方では企業の人材不足が喫緊の課題です。そのため、デジタル技術を活用して業務効率化や生産性の向上、組織や企業文化を革新するDXが求められています。この講義は教育機関と協働のアプローチで、kintoneアプリの構築を学び、地域の企業が抱える課題を学生と企業が一緒に解決していく取り組みです。

2025.11.10 ニュース プレスリリース

地域のDX課題を解決する人材を育成へ  
— 新潟産業大学、サイボウズ社と連携し、経済経営学科で「kintone」を用いた新講義を開始 —

新潟産業大学 DX人材育成プログラム提供開始

### 地域の人事部の活動（新潟県上越エリア）

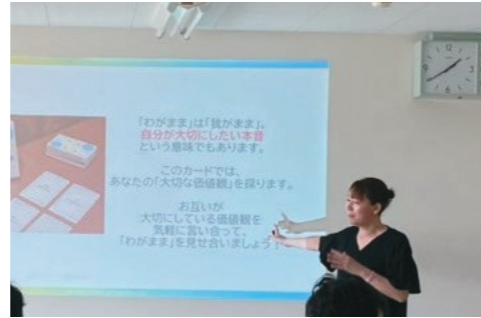
「地域の人事部」は、経済産業省が提唱する、地域企業が連携して人材確保や育成を行う仕組みです。現在、新潟県上越エリアを中心に、定期的なミーティングや勉強会を行っています。近年では行政機関の関心も高まってきており、妙高市をはじめ相談を受けるケースも増えてきました。また、新潟県三条市をはじめ、エリアを越えた学びの動きも始まっています。

# 4 就労困難者支援プロジェクト

## 2025年度の成果

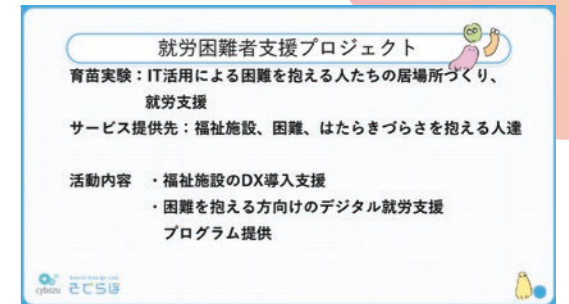
### 静岡県伊豆エリアでの3市合同研修の実施 (静岡県 三島市・伊豆市・伊豆の国市)

2025年度は、静岡県伊豆エリア（三島市・伊豆市・伊豆の国市）の3市合同研修を実施しました。この研修は、kintoneアプリ作成スキルを身につけるだけでなく、継続的な業務改善を実践できる人材を育てることを目指しています。また、自治体の垣根を越えて合同で実施することで、知恵の共有による市民サービスの向上につなげることを目指しています。研修では、共通の課題について議論を深めるうちに、似たような課題を持っていることに気づき、それをきっかけに自然と前向きな対話が生まれていました。今回の研修を通じ、立場や組織を超えてDXを推進する仲間が増え、確かな絆が生まれていました。一つひとつの自治体が抱える課題をきっかけに、地域の壁を越えて共にほどいていく。そんな新しい連携の形が、この伊豆エリアから着実に動き出しています。



## 「就労困難者支援プロジェクト」とは

働きづらさを感じている人や、障がいのある人など、就労が難しい状況に置かれている方は少なくありません。そこで私たちは、そうした方々に「kintone」のスキルを身につけていただくことで、働き方の選択肢が広がるのではないかと考え、取り組んでいます。通勤が困難でもリモートワークなら働ける可能性があり、ITスキルを身につけることで新たな仕事の選択肢も広がります。多様な個性が活かされ、誰もが自分らしく働ける社会を実現することは、より良いチームワークと社会の豊かさにつながると考えています。



就労困難者支援プロジェクト

## 2026年度の活動予定

2026年度は、これまでのつながりを活かし、新潟産業大学では金融機関との連携により、地域の企業と学生と一緒に学ぶ機会をつくり、より重層的なチームづくりを目指します。また地域経済の活性化に向けたイベントも開催予定です。目の前の課題と粘り強く向き合いながら、より広い範囲に活動が広がっていく機会をつくっていきます。今後の活動にもご期待ください。

## 2025年の取組みについて

今年度は下記の3つの事業所と一緒にkintoneを活用した新たな就労支援モデルづくりに取り組みました。主に研修の理想づくり、kintone研修の提供、アプリ開発の伴走、研修後アンケートなどを中心に行いました。各事業所での研修の様子についてお伝えします。

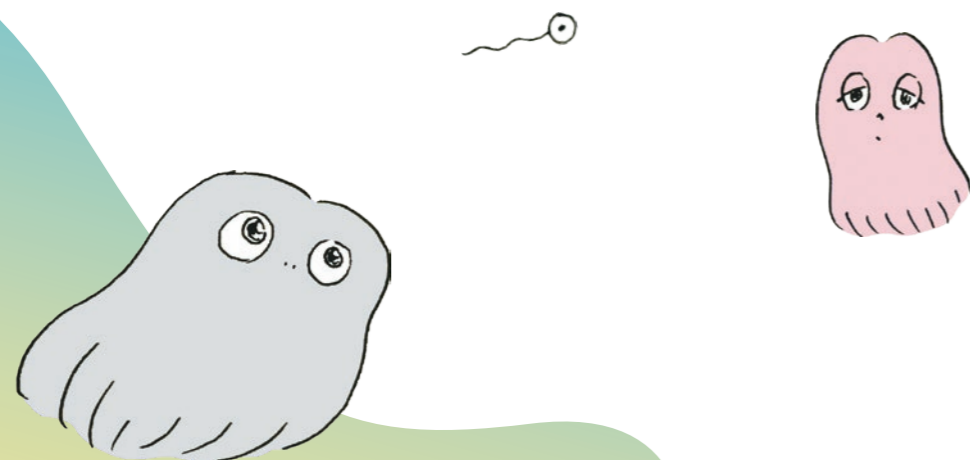
### デジKAMA

デジKAMAは、鎌倉市が2022年に開設したデジタル就労支援の拠点で、VALT JAPANが市から委託を受けて運営しています。障がいのある人やひきこもり状態にある人が、地域の一員として安心して社会とつながれるよう、在宅や通所でパソコンを使った仕事の機会を提供しています。

支援期間（6か月）を通じて、ワーカーには習得スピードの速さだけでなく、「できることが増えていく」実感に伴う自信の変化も見られました。実際の仕事に活かせるかもしれないという将来への見通しが自己肯定感を押し上げ、就業につながった事例も生まれました。

### 多機能型事業所Re.co.

多機能型事業所Re.co.では、利用者一人ひとりに合ったサポートを大切にしながら、kintoneを運営に取り入れています。今年度は、メンバーと一緒にハンズオン講座を開催しました。



# 5 障害福祉 / 共創プロジェクト

実際にRe.co.で利用している日報アプリをメンバーそれぞれが作成しました。また、個別学習やメンバーを交えた週次ミーティングも開催しています。さまざまな種類のフィールドを扱う日報アプリを題材にしたことで、1つのアプリ作成の中で、基本操作から応用までを網羅的に学べる構成となりました。



多機能型事業所 Re.co. 日報アプリ

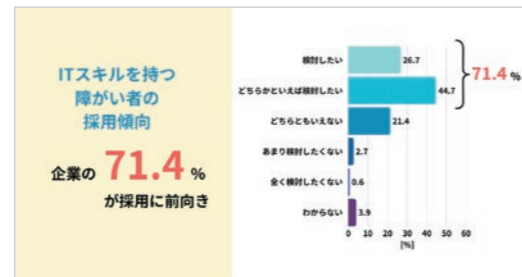
## 就労移行ITスクール登戸

就労に近い段階の利用者が多い特性を踏まえkintone講座は初級・中級・上級の3段階で構成し、段階的にスキルを高めながら就労移行に挑戦できるようにミーティングを重ねて一緒に作っていきました。現在は、上級コースのカリキュラムを利用者と一緒に考えており、2026年にプログラミング知識なども含めた上級編を利用者が講師となって実施予定です。

## 2025 年度の成果

### 「IT人材不足と障がい者雇用に関する意識調査」を実施

今年度は障がい者雇用に関する調査を行い、IT人材不足を考えるうえで「障がい者雇用」にヒントがあるかもしれないことが見えてきました。7割以上の企業が、ITスキルを持つ障がい者の採用に前向きで、いまは「DXを支える仲間」として期待が高まっています。さらに3事業所での活動から、働き手側も学ぶ意欲が高いと実感しました。一方で企業には業務設計やコミュニケーションに不安を感じる声も残っています。この「働き手の意欲」と「企業の不安」をどうつなぐのかが今後の重要なポイントとなります。



IT人材不足と障がい者雇用に関する意識調査 URL

## 2026 年度の活動予定

2025年度の取組みを通して、就労困難者のkintoneスキルが伸びていく手応えと、福祉の現場で役立つアプリを開発できそうだという可能性が見えてきました。2026年度はアプリパックを開発・リリースし、完成後はお客様支援にもご一緒いただき、実務経験を重ねながら社会復帰につなげていきます。

## 「障害福祉 / 共創プロジェクト」とは

私たちソーシャルデザインラボでは、「チームワークあふれる社会を創る」を理想に掲げ、多様な価値観の人が安心して暮らしている社会づくりを目指して活動を行っています。主にパラスポーツの協賛、多様な居場所づくりのご紹介、イベントの共催、困難を抱える方との当事者研究など幅広い活動を行っています。

**障害福祉/共創プロジェクト**

**目的:** 多様な価値観の人が安心して暮らしている社会づくり

**協働先:** パラスポーツ団体、多様な居場所、困難を抱える方等

**活動内容**

- ・パラスポーツ活動支援
- ・多様な居場所づくりのご紹介 (note)
- ・イベントの共催
- ・当事者研究

障害福祉 / 共創プロジェクト

## 2025 年の取組みについて

### 日本パラスポーツ協会のオフィシャルパートナーとして協賛

日本パラスポーツ協会がkintoneを活用して業務改善を進めていたことがきっかけとなり、オフィシャルパートナーとして協賛することになりました。

今後は、利用者の視点からkintoneへのフィードバックを受取り、アクセシビリティの向上や、連絡手段の一元化によるさらなる業務効率化など、お互いの多様性を尊重しながら協力し、社会に貢献することを目指します。



連絡手段の一元化による kintone 活用法

### 第一回kintone杯 電動車椅子サッカーエキシビジョンマッチへの協賛

5月に「第一回kintone杯電動車椅子サッカーエキシビジョンマッチ」が開催されました。当日はサイボウズが協賛する「太田川ORCHID」と「DKFBCディスカバリー」が対戦しました。会場では、電動車椅子の



第一回 kintone 杯 電動車椅子サッカーエキシビジョンマッチ

試乗体験会も行われ、大村愛知県知事も参加されました。

### インクルーシブな居場所（サードプレイス）のご紹介

多様な人々がありのままで交流する社会になることを願って、多様な方の居場所を取材し、note記事としてご紹介しています。今年度は下記の居場所をご紹介させていただきました。取材をきっかけに運営のITを活用した効率化のご相談をいただき、kintoneを活用した業務改善の支援につながっています。



インクルーシブな居場所  
note

- **NIMOALCAMO**：既存の制度やルールの中で生きづらさや働きづらさを感じる人々が、自分らしく活躍できる新しい働き方を提案しています。
- **麦の郷**：障害のある人たちが地域の中で安心して暮らし、働ける場を目指してさまざまな生きづらさに向き合いながら誰もが安心して過ごせる居場所やチャレンジできる場づくりをしています。
- **夢育て農園**：一人ひとりの心にある小さな「夢のタネ」に耳を傾け、その芽を育てる活動をしています。認知能力を伸ばすことを農業やプログラムで行っています。

### 『「はじめの100か月の育ちビジョン」をどう読み解くか みんなで考える』イベント開催

すべての子どもが遊ぶことの価値を享受できるような様々な事業展開をしている一般社団法人TOKYO PLAYと一緒に子ども家庭庁が策定した「はじめの100か月の育ちビジョン」を読み解き、みんなで考えるイベントを開催しました。全国から多様な立場の専門家や実践者とともに100名以上が参加しました。クロストークの間には参加者が主役の対話タイムもあり、参加者自身が「これについて話したい」というテーマを持ち寄りながら自由に対話する場が設けられました。



『はじめの100か月の育ちビジョン』をどう読み解くか  
みんなで考える

## 2025年度の成果

### kintoneを活用した当事者研究

#### このプロジェクトの効果

- ① 気持ちを選ぶ練習や気持ちを文章化する練習
- ② 困ったときの気持ちの置き場
- ③ 自分の好きな文章を見てもらえること

kintoneを活用した  
当事者研究の効果

身体や精神の障害のある若者とkintoneを活用した当事者研究を3年前から行っています。当事者研究とは、困難を抱える当事者が、仲間と一緒に自分自身の困りごとを「研究対象」として観察・仮説・実験・共有する活動です。

kintoneを活用した日記「今日も生きれたよ」アプリでの交流と定期的なミーティングを行いながら一緒に研究を進めています。

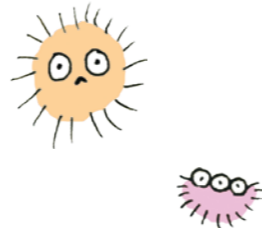
アプリへ気持ちの入力を行うことで、気持ちを選ぶこと、気持ちの置き場、自分の状態を周囲へ伝えることの練習に役立つことがわかりました。また「しんどさ」をより詳しい症状や気持ちとして選べるようにすることで変化がグラフで把握できるようになっています。

## 2026年度の活動予定

2026年は、国際的な障害団体とのイベントも実施予定です。多様な人々が交流し、自分の居場所をみつけれられる社会を目指し、関係性を深めながら協働できる機会をさらに増やしていきたいと考えています。



# 6 虐待防止プロジェクト



## 「虐待防止特別プラン」とは

サイボウズでは、虐待で苦しむ子どもたちを少しでも早く助けるために2018年より虐待防止に取り組む機関の連携にクラウドサービスを5年間無料で提供する特別プランと専用窓口を設けています。

2025年末時点でのべ20団体がkintoneをはじめとするサイボウズのクラウドサービスを虐待防止の特別プランで導入し児童福祉の連携に役立てています。

目的	児童虐待防止
きっかけ	2018年の船戸結愛ちゃん虐待死事件 「なくそう！子どもの虐待防止プロジェクト2018」
対象	児童相談所・児童福祉関係者の連携
内容	・クラウドサービスを5年間無料で提供 ・新しい活用モデルをつくる広げる

虐待防止特別プラン

## 2025年度の取組みについて

### 新たに愛媛県・新居浜市で導入

2025年は新たに愛媛県新居浜市で市区町村での学校・保育所・幼稚園・役所が連携する要保護児童地域対策協議会におけるkintoneの利用が決定しました。

2022年に虐待防止の相談窓口にご相談いただいていた政令指定都市では子ども家庭センターでのサポートプランの共有でkintoneの利用がスタートしています。

江戸川区で活動している事業所では、児童相談所との連携及び受託業務に活用している事例もあります。

### オレンジリボン・虐待防止推進月間イベントの協賛

虐待防止推進月間には江戸川区のアリオ葛西で実施した特定非営利活動法人チャイボラ主催の延べ2,000名以上が来場する「つなげようオレンジリボン2025」にブース出展や物資提供で協賛。来場する親子に互いの気持ちを知り、子育て支援を「身近なもの」に変えるきっかけを提



「つなげようオレンジリボン2025」を協賛

供しました。

### kintone活用モデルの展開

こども家庭庁による「児童相談所等におけるデジタル技術の活用状況等の実態把握のための調査研究」に協力し事例を提供したほか、里親家庭支援センターや児童家庭支援センターでの全国研究会や札幌、名古屋、和歌山で虐待防止の取り組みや事例を紹介しました。

## 2025年度の成果

### 東京都・児童相談所と児童養護施設の連携モデルの運用開始

東京都は現場対話型スタートアッププログラム事業で、東京都と特別区の児童相談所計20か所と児童養護施設66か所との連携で「入所状況をリアルタイムで見える化できるシステム」にkintoneをベースとしたクラウドサービスを採用し試行実践を実施。



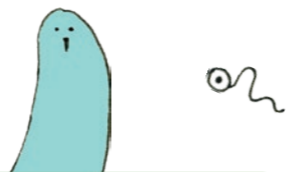
入所状況をリアルタイムで見える化できるシステム

システム構築を手がけた株式会社FISTBUMPは「スタートアップ × 行政 Meet UP! 2025」や自治体向けDX・AIセミナーで成果を発表。試行実施後アンケートでは、児童相談所職員の81%、児童養護施設職員の67%が期待できるとの結果となったことを報告。夏以降は本運用となりました。

## 2026年度の活動予定

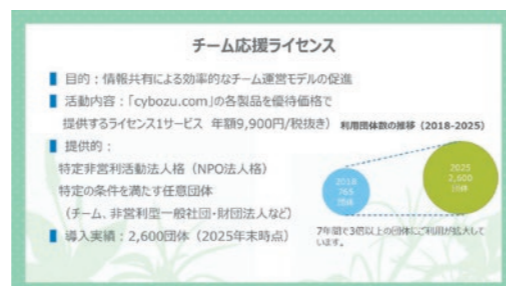
kintoneを活用し有効性を感じられている自治体からは都道府県の児童相談所との連携や措置費のとりまとめに使いたいといった相談も受けています。今後も使い勝手に関するご意見をうかがいながら多様な関係者と協働し新たな活用モデルの構築・発信に取り組んでまいります。今年の活動にもご注目ください。

# 7 非営利団体との協働プロジェクト



## 「非営利団体との協働について」

サイボウズでは、2015年よりNPO法人にクラウドサービスを特別価格で提供する「NPOプログラム」を開始しました。2018年からは業務効率化ツールへの投資が困難な非営利型一般社団・財団法人、町内会、サークル、PTAなど任意団体にも範囲を広げた「チーム応援ライセンス」を提供し、2600を超える非営利団体にご活用いただいています。



チーム応援ライセンス

さらに社会課題に取り組む団体とのイベントでの協働、IT活用交流会「チーム応援カフェ」の開催、アプリパックの提供、中古PCやスマホの寄贈など幅広い活動を行っています。

## 2025 年度の取組みについて

### Roots キャリアフェスで外国ルーツの若者と将来について語り合う

認定NPO法人カタリバが取り組む、外国にルーツをもつ若者と働く大人が語り合う「Roots キャリアフェス」に参加しました。本イベントは、家族の仕事の都合で日本に来日し、日本で学ぶ高校生・大学生世代が、働く大人との対話を通じて、自分が大切にしている価値観や働き方を言語化し、将来を考えることきっかけとするものです。「多様な個性を重視」や「対話と議論」を大切にサイボウズの文化とも重なるテーマであり、私たちは「わがままカード」を使い、「多様な人とチームワークを発揮するために大切なこと」をテーマに語り合いました。



Roots キャリアフェス

#### 参加者の感想

- 「仕事には『ミッション』と『コネクション(人脈などつながりをもつこと)』の両方が大切だと学んだ」
- 「全部大事だから選ぶのが大変だったけど、『Freedom (自由)』を選んだ。自分で決めて、自分の意思・意見で働く方が楽しかった。『Freedom』は簡単に手に入れられるものではないからこそ、手に入れるためにモチベートされる」

参加者の感想

カードを見ながら、自分が大切にしたい想いに気づく若者もいれば、意外な結果に驚く若

者もいました。実際のカードを手に取り、ほかの人と話し合うことで、自分の価値観や本音が少しずつ見えてくる。目の前の相手との対話だけでなく、自分自身と向き合う時間がうまれている様子がとても印象的でした。

## 2025 年度の成果・学び

### 日本ブラインドサッカー協会とサプライサービスパートナー契約を締結

特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会は、「視覚障がい者と健常者が当たり前混ざり合う社会」の実現を目指し、さまざまな活動に取り組んでいます。同協会は2015年よりkintoneやメールワイズを導入し、業務効率化に活用してきました。2025年は、相互連携をより一層強化することを目的に、サイボウズとサプライサービスパートナー契約を締結しました。



日本ブラインドサッカー協会の kintone活用事例

具体的には、管理系部門では、勤怠管理、押印申請、契約管理、倉庫備品管理、社内用語集などに、事業部門では、スポンサーや企業研修、体験授業などの案件管理、外部連携先との情報共有にkintoneやメールワイズを活用しています。

### チーム応援カフェの開催、フリースクールアプリパックの提供開始

定期開催している「チーム応援カフェ」を妊娠SOS、フリースクール、障害福祉、スポーツ、PTAをテーマに開催しました。登壇団体からご提供いただいた実際のkintoneアプリをサイボウズの楽校で使っているものとあわせてフリースクール向けアプリパックとして無料提供を始めました。

## 2026 年度の活動予定

kintoneを活用し有効性を感じられている自治体からは都道府県の児童相談所との連携や措置費のとりまとめに使いたいといった相談も受けています。今後も使い勝手に関するご意見をうかがいながら多様な関係者と協働し新たな活用モデルの構築・発信に取り組んでまいります。今年の活動にもご注目ください。

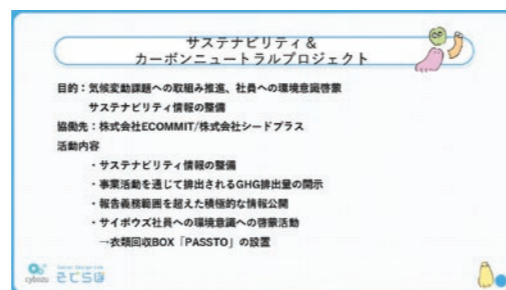


サイボウズ チーム応援ライセンス

# 8 サステナビリティ & カーボンニュートラルプロジェクト

## 「サステナビリティ&カーボンニュートラルプロジェクト」とは

2年連続で最高気温を更新する猛暑や、各地で相次ぐ気象災害。私たちは今、気候変動の影響をかかってないほど身近な課題としてとらえています。サイボウズでは、カーボンニュートラルプロジェクトを中心に、昨年、Scope1,2に続き、事業活動全体を俯瞰するScope3の算定に着手しました。この取り組みを通じて部署間の連携も深まり、できることから着実に前進できた1年となりました。2025年度は、カーボンニュートラルという枠を超え、より広いサステナビリティの視点を持って活動の幅を広げています。仲間やパートナーとともに、着実に進むサイボウズの現在地をご報告します。



サステナビリティ&カーボンニュートラルプロジェクト

## 2025年の取組みについて

### サステナビリティ情報の集約・発信体制の整備

昨年度、kintoneを活用して他部署とスムーズにデータを集約できた成功体験をベースに、今年さらには一歩踏み込みました。活動に関心を寄せてくれた社員を中心に協力者を募り、「カーボンニュートラルワーキンググループ」を発足。開発、マーケティング、知財、経理など多方面の専門家が「自分たちにできることはないか」と賛同してくれたことで、より多角的な社内協力体制が整いました。この新たなチームを中心に、社内にて点在していたサステナビリティ関連情報を整理し、社内外へ一貫性を持って届けられる発信体制の構築を進めています。



サステナビリティ Web ページ

### カーボンニュートラル目標の設定

昨年度の算定結果をもとに、具体的な温室効果ガス削減計画の検討に入りました。実効性を伴わない数字を安易に掲げることへの葛藤もありましたが、ワーキンググループでの対話を経て「サイボウズらしい高い理想を掲げ、着実に歩もう」と決意。2030年度カーボンニュートラル（Scope1, 2ゼロ）、2050年度ネットゼロ（Scope1, 2, 3実質ゼロ）を目指します。削減を単なる

コストではなく、再エネ比率の高いデータセンター活用や、リモートワークによる排出抑制、自社製品を活用したデータ管理の効率化など、事業と地続きの施策を模索していきます。今後も関係部署と丁寧に合意形成を行い、全社でこの目標に向き合ってまいります。

## 2025年度の成果

### 衣類回収BOXを活用したIoTセンサーを用いた実証実験

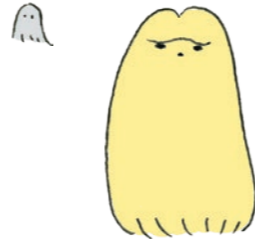
昨年度から継続して株式会社ECOMMITと協働で取組みを行っている衣類回収BOX「PASSTO（パスト）」の運用において、新たな課題に直面しました。リモートワーク中心の働き方では、オフィスの回収BOXの状況をリアルタイムに把握できず、衣類がBOXからあふれてしまう状況が度々発生していました。そんな折、イベント会場で出会った株式会社シードプラスにこの悩みを相談したところ、解決の糸口がわかりました。実装したのは、BOXの天井にレーザーセンサーを配置し、衣類の積載量を検知してkintoneへ自動登録する仕組みです。これにより、回収状況の「見える化」が実現し、適切なタイミングでの回収が可能となりました。社員がいつでも気持ちよく衣類を投入できる環境を整えた結果、今年度は103.16kgもの衣類・雑貨をオフィスで回収し、次なる活用へとつなげることができました。



衣類回収BOXを活用したIoTセンサー実証実験

## 2026年度の活動予定

2025年度に掲げた目標に向け、2026年度は「算定」から「実行」へとさらに歩みを進めていきます。策定したロードマップを道しるべに、温室効果ガス削減の取り組みを少しずつ実行に移していきます。進捗や考え方はわかりやすくお伝えしながら、自社製品を活用したデータ管理も整備して、業務の効率化と環境負荷低減の両立を目指します。さらに、実証実験で得た学びを生かし、気候変動領域でのDX連携先も探してまいります。一足飛びにはいかないもどかしさがありますが、社内外の仲間とともに、持続可能な社会の実現に向けて「サイボウズらしい」一歩を積み重ねてまいります。

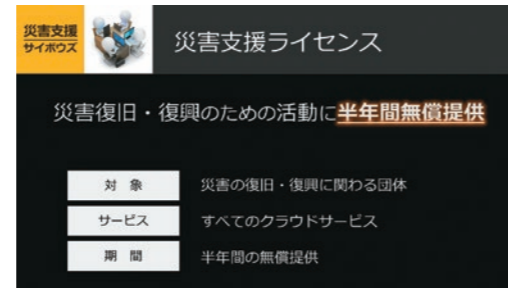


## 「災害支援プロジェクト」とは

サイボウズは被災地支援活動での経験をもとに、「災害支援プログラム」を2020年1月より開始しました。6か月間のITツール無償提供や、チームによる情報共有システム構築・運用支援、20社以上のパートナーと連携した構築支援やサービス提供を行っています。

プログラムの主な利用用途としては、災害ボランティアセンター（以下、災害VC）運営システム、避難所把握、避難者名簿管理などとなります。

現在47都道府県中43都道府県社会福祉協議会（以下、社協）、200を超える市町村社協にてご導入いただいております。



サイボウズ災害支援ライセンス

## 2025年の取組みについて

### 罹災証明データを活用したDWATとの新たな連携スタート

9月に静岡県牧之原市の竜巻災害支援の現場にて罹災証明データをDWAT（災害派遣福祉チーム）が訪問調査に活用し、記録をkintoneで一元管理する仕組みが始まりました。10月の八丈島台風災害支援現場でも同様にDWATがスマートフォンを活用した聞き取り調査を開始。kintoneを使いこなし、罹災証明のデータをもとに調査範囲を広げ、1日100件以上の調査・報告が行えるようになりました。

### 別府市インクルーシブ防災訓練

2025年度は防災訓練研修のご依頼を多くいただき、65回の研修を各地で実施しました。7月には別府市にて「誰ひとり取り残さない防災へ～災害関連死ゼロを目指して～」をテーマに、障がい者団体と

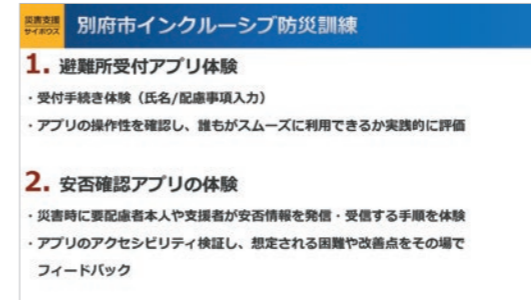


罹災証明書データを活用したDWAT連携モデル

行政が連携してインクルーシブ防災訓練を行いました。

インクルーシブ防災訓練とは、年齢・性別・国籍・障がいの有無・経済的状況などに関係なく、すべての人が災害から等しく守られることを目指す考え方です。近年の大規模災害の頻発により、従来の画一的な防災訓練では限界があることが明らかになっています。

本訓練は、官民協働による地域コミュニティの強化につながるとともに、多様な人々のニーズにこたえる防災のあり方を、実践的に学ぶ貴重な機会となりました。



別府市インクルーシブ防災訓練の内容



別府市インクルーシブ防災の様子

### 災害支援学生ボランティア育成プログラムスタート

近年の災害支援現場でのIT活用が進んだことから、より地域社会の災害支援体制を継続的に強化するために、「災害支援学生チーム育成プログラム」を開始しました。平時にはオンライン研修の実施や地域受け入れ団体と連携して避難所や災害VC等開設訓練に参加します。募集を行ったところ100名以上の学生ボランティアと16の団体が集まりました。月1回1時間、全8回のオンライン研修で「社会福祉協議会の役割」や「災害支援の基本」を学び、実際にkintoneに触れながら災害支援に備え活動を行いました。プログラムの終盤には、有志の学生が学びや視点を共有するオンライン登壇を行いました。



災害支援学生チーム育成プログラム

### 台湾災害支援視察団との交流

台湾の福祉や防災の専門家と「災害時にICTをどう活かす？」というテーマで日本の災害支援におけるICT活用事例の共有を行いました。サイボウズ災害支援チームのkintoneを活用した災害VCや避難所支援システムを実演。QRコードによる受付、ニーズ管理、地図とダッシュボードの支援状況の見える化など現場で役立つ工夫を紹介し、台湾の皆さんも強い関心を示してくれました。今回の交流で台湾の参加者からは「福祉とICTの統合は、台湾の防災にも重要なヒントになる」との声がありました。



台湾視察メンバーとサイボウズ災害支援チーム

## 2025年度の成果・学び

### 災害VC臨時コールセンターでの実証実験成果

災害VC臨時コールセンターとは、災害発生時に被災地外に「臨時コールセンター」を立ち上げ、災害発生直後の約1週間、被災地外の社協職員がIP電話システムを用いて電話対応を代行する仕組みです。これにより、被災地の社協が現地での直接支援に専念できる環境を構築します。2025年度は実証実験を計3回実施し、1月には神戸市社協、6月と11月には奈良県社協や奈良県下の市町村社協の職員とオンライン訓練を行いました。1月の実験で浮き彫りとなった「受電と記録入力の同時並行の難しさ」という課題に対し、6月は「ヒアリング時間の目安（5分）の設定」「情報の最小化」「ネットワーク環境の整備」の3点を改善して臨みました。一連の訓練を通じ、限られた時間で正確に情報を聞き取るスキルの必要性や、平時からの継続的な訓練の重要性を再認識することができました。今後は、訓練シナリオをブラッシュアップし、より多くの社協に実践していただきたいと考えております。

災害コールセンター入力アプリ

## 2026年度の活動予定

2026年は、政府、全国の自治体、社協職員、関係機関と協働しながら避難者名簿フォーマットの統一、被災者台帳の整備、災害コールセンターなどを中心に取り組を進めていきます。また、海外では台湾の災害支援チームとの連携も図る予定です。今後起こりうる可能性の高い有事に備え、より実用的な災害支援の形を探求してまいります。今年度の活動もご期待ください。



サイボウズ災害支援プログラム

## 10 あとがき



「サイボウズ ソーシャルデザインラボ活動報告書2026」を最後までお読みいただき、ありがとうございます。

現在、10名のメンバーがそれぞれの関心を起点に社会課題と向き合い、日々試行錯誤を重ねています。本報告書を編むなかで、私たちの活動が一年ごとの積み重ねによって、少しずつ「つぼみ」から「花」へと歩みを進めていることを、あらためて実感しました。

就労困難者支援プロジェクトでは、昨年までの居場所の取材を足がかりに、今年は障害のある方がスキルを身につけ、具体的なDX支援を担う機会をつくり、現場での実証へとつなげることができました。カーボンニュートラルプロジェクトでも、課題を共に解決してくれる仲間と出会い、解決策を具体的な形にするところまで前進しました。一方で、現場はいつも順調とは限らず、葛藤や苦勞に立ち止まりそうになることもあります。それでも、そでらぼのメンバーは決してあきらめず、学びを力に変えて理想へ向かって立て直していく——その背中に、私は何度も勇気をもらいました。『次の一歩の先が、かなえない未来につながっていく。』私たちの目指すのは一時的な支援に留まらず、ITとチームの力で社会の仕組みそのものを少しずつアップデートしていくことです。多様な人々が手を取り合い、誰もが主体的に関われる「チームワークあふれる社会」を願い、これからも歩みを重ねます。2026年度はこの一歩をさらに全国へ広げ、社会インパクトをより大きくしていく所存です。この報告書が、みなさまに私たちの情熱をそっと届け、ともに歩むきっかけとなれば幸いです。なお、各プロジェクトの最新情報は、更新SNSやソーシャルデザインラボWebページでも発信を行ってまいります。以下のQRコードよりぜひご覧ください。

また、私たちの活動に関心をお持ちいただいた方、「詳しく話をきいてみたい」と感じていただける方はぜひ、お気軽にお声がけください。



サイボウズソーシャルデザインラボ  
2026年活動報告書編集担当

小椋としえ 中村龍太

お問い合わせ：po@cybozu.co.jp



公式 note



ソーシャルデザインラボ  
Web ページ





Social Design Lab.

そでらほ

